

論文の内容の要旨

19世紀半ばパリの田園郊外に関する研究 —ヴェジネにおける住宅地開発を通して—

安田 結子

ヴェジネというコロニーは、19世紀半ばの新興の中流ブルジョワ層が、パリ郊外に社会上昇の証としてだけでなく、アイデンティティの表出として自由に勝ち取った場所であった。とはいえ、他の住宅地と大きく異なるのは、450ヘクタールにも及ぶ広大な英国風景式の公園内に計画されたということである。公園には住民以外の人々がパリから訪れる場所であり、緑地は彼等のためにも開放されており、非常に開かれた住宅地であった。さらに住宅は「囲い」を目立たなくするように規制することで、風景に溶け込むような配慮がされ、人の目を気にするプライバシーよりも景観が優先された計画だったことがわかる。これは当時の別荘滞在の目的が社交生活のためであったことを鑑みれば、不自然なことではない。

また研究の結果、住宅地の開発が緑地である「プルーズ」を中心とした第1期と、その後の「リゾート開発」の第2期に区分されることが明らかにされた。第1期においては、ヴェジネの住宅地が「プルーズ」を中心に区画していったことがわかる。「プルーズ」沿いの住宅地は値段の上でも高かった。これは外から見た家の景観だけでなく、住宅内部からの窓から見える景観も重視されていたことがわかる。

このような公園計画を実際に考えたパリュ伯爵の功績は大きく、パリュのヴェジネにおける業績は、フランスにおけるペイザジスト（景観設計者）という職能が確立した重要な例であるといえる。

他方、初期の開発者である産業資本家であるアルフォンス・パリュは、表向きには、あくまで健康的で良好な環境をアピールして、なるべく多くの住宅地を分譲しようとしたが、彼の思想の背景には、当時の産業資本家にみられる社会主義的理想があった。彼はヴェジネの住民を一部の特権階級に限定せず、ローン制度を導入して、住宅を購入しやすくし、また「学校都市のプロジェクト（未完）」を構想するなど、産業の繁栄のための人材育成という側面もヴェジネに託していたのである。

当時の第二帝政を率いるナポレオン三世も、パリ市内では労働者住宅建設に熱心にとりくんだが、ヴェジネにおいてはリハビリ期の労働者のための施設である「施療院」を建設し、労働者の活力を高めるというサン＝シモン主義の理想を実現する場所をこのブルジョ

ワ住宅地に建設した。

ヴェジネは同時期のファランステールなどの、産業資本家による労働者のためだけの協同型住宅地ではなく、ブルジョワと労働者双方を一緒に取り込んだ町づくりがなされていた。ヴェジネ実現の契機には第二帝政下の社会主義ユートピア（サン＝シモン主義）思想の影響が大きかったという証であり、近代の郊外住宅地が鉄道沿線で発展したという過程は、イギリスと共通する側面があるが、この点では大きく異なる。

別荘住宅の建設もヴェジネの施主のファンタジーをかきたて、様々な様式の住宅が建設されたが、住宅の内部空間の計画は近代化と当時の家族重視の姿勢を反映したものになっていた。豪華さをアピールするための意匠以外に、コテージやシャレ建築など簡素なデザインを志向する傾向があったのもこの時期の特徴である。

日本の郊外住宅地の多くはハワードの「田園都市論」を参考にしたといわれているが、開発手法においてはヴェジネと類似するところが多い。例えばロン・ポワンから放射線に延びる軸線道路の計画は田園調布等と類似し、またイメージづくりの戦略として、鉄道会社と協同で、「緑や美味しい空気や水」を強調し、ポスターやパンフレットをつくって宣伝したことも阪急電鉄の手法と類似する。ヴェジネでは住宅地に競馬場、ハイドロセラピー施設、カジノなどのリゾート施設を建設したが、日本でも多摩川園や宝塚では遊園地がつくられた。対してアングロサクソン型の郊外住宅地には、このようなリゾート施設の混在はあまりみられない。日本の郊外住宅地として今後、ヴェジネのような「田園郊外」も視野に入れていくことも大切であると考えられる。